

[第31回学術集会 シンポジウム2 災害委員会コラボ企画]

災害時におけるご遺族としての高齢者と家族を支える —令和6年能登半島地震のご遺体安置所での活動を通して—

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部救急救命学科

久保田千景（家族支援専門看護師）

未曾有の災害が発生する昨今、地震や津波による家屋の倒壊により人々は住処の変更を余儀なくされる。発災による恐怖、余震が続くこと、住居が避難所から仮設住宅、災害公営住宅等へと移り変わるという環境の変化は、高齢者にとって身体的にも心理的にも影響を及ぼす。災害はさまざまなストレスの源となり、うつやPTSDを発症しやすい。被災者家族の中には認知症である家族員がもともと存在している場合もあれば発災そのものによる影響や、その後目まぐるしく変化する生活環境の中において、認知症を発症する場合がある。

元旦に発災した令和6年能登半島地震において人々は、遠方から帰省した家族員との一家団欒が断ち切れ、家屋の倒壊、愛する人・物・思い出・地域のコミュニティなど多くの喪失を経験した。我が国の急速な高齢化は、被災者の高齢化ともいえるが、災害発災という安全な暮らしを担保することが

難しい環境は、被災者である高齢者が認知症となるリスクが高まることは看過できない。私は日本DMORT（Disaster Mortuary Operational Response Team：災害死亡者家族支援チーム）の一員として、令和6年能登半島地震において石川県警察との連携の元、能登半島に設けられたご遺体安置所で、ご遺体のエンゼルメイクおよびご遺族への支援を実践した。災害急性期に対面のためにご遺体安置所を訪れた方々は高齢者が多く、車中泊や避難所での生活という厳しい環境に身を置き、ご遺体となられた愛する家族員との対面を求め何とかご遺体安置所にたどり着いたという状況であった。高齢であるということから既に様々な健康問題を抱えている現状についての支援も必要であった。高齢者は発災により、さまざまな影響を受ける。愛する人を喪失すること、生活環境の変化により高齢者が認知症となるリスクや支援について今後も考えていきたい。